

## 琵琶湖とのかかわり

**司会** 内藤さんが、琵琶湖と最初にかかわられたあたりからお話し頂けますか。

**内藤** 考えてみますと、妙な縁なんです。琵琶湖の流域下水道計画は、日本で最初のものですが、それに直接携わったのが最初です。

**川那部** 内藤さんご自身としても初期のものでしたね。

**内藤** 助教になってすぐの、依頼を受けて行った最初の仕事です。建設省側からは一定の評価を受けて、いくらか満足したとたんに、住民の方から「うわっ」ときたわけで、何ごとかと驚きました。裁判も起こってたいへんでしたが、恥ずかしながらも、何を問題視されているのかも、最初はあまりよく判っていませんでした。

**川那部** そのあたりは、ぜひとももう少し詳しく。

**内藤** 考えてみれば、「環境を正しく、良いものにする判断基準」とは「いったい何か」と言うことだったのです。「下水道処理をして水をきれいにしたら、それで良い」ということではなかったことに、やっと気付いたのです。「評価基準」はいろいろあって、環境にかかわる限り、そのどれかだけを選ぶという判断は、技術者のレベルとするわけにはいかなかったんだと。

「私なりにいろいろ目配りはし

なければ、こういう前提のうえでのもので」とは、あのとききつちり言わなかった。むしろ、「水はとにかくかなりきれいな。それでどうしていけないのか」と言ったわけですね。下水道に関しては当時、一般にそういう程度の段階でした。だけど、それはもうすでに、判断としては時代遅れだったということ、正面から突きつけられたのです。

## 琵琶湖と霞ヶ浦

**司会** それで、霞ヶ浦での仕事が始まるわけですね。

**内藤** ええ。国立環境研究所へ行って、その立ち上げそのものに関与したわけです。すぐそばにある霞ヶ浦について、何もしないような環境研では意味がないなどとも言って。

茨城県のためという限定はできないけれど、モデルとして霞ヶ浦も扱えないようでは、偉そうなことは言えないと、当時のメンバーの総力を挙げてやりました。その中に、霞ヶ浦と琵琶湖との周辺住民の意識調査の比較が少し入っていたんです。琵琶湖周辺の人たちの湖への関心・愛着は、圧倒的でした。それに対して霞ヶ浦周辺の人は、目の前にあるというのに「霞ヶ浦なんて、ここ何年も見たことがない。行ってどうすんねん」みたいな感じだった。

**川那部** それも含めて、第一回湖沼会議で発表されたわけですね

**内藤** そうなんです。このほうは私の本業ではなかったのですが、地球儀を背負って、酒を飲みながら話す外国人を含めて、何人かの方々に面白がって頂きました。**川那部** ははは。富栄養化の権威として知られるカナダのヴァレンタインさんですね。**内藤** それからもう一つ、はじ

# 琵琶湖を救う手だて

## 多様な豊かさに支えられた循環型社会をこそ

2005年5月11日(水) 琵琶湖博物館館長室にて  
司会進行 / 杉谷博隆

生半可な対策などでは、言われるとおり無理だと、私も思っています。

琵琶湖博物館館長  
川那部 浩哉



めてシステム解析を霞ヶ浦でやったのです。魚からプランクトンから、物理学的なデータも何もかも全部ぶちこんで、一つの予測を立てたら、どんな対策をやっても、霞ヶ浦の保全は難しいということになってしまったんです。条件を変えていろいろとやっても、極めて難しいんです。

## 循環共生社会システム研究所

**司会** 内藤さんが立ち上げられた「循環共生社会システム研究所」も、そういう考えを背景に生れたものと、理解して良いのでしょうか。

**内藤** 持続可能な社会を実現する手段としては、循環というふうな、多少ハードなしくみと、共生というソフトな人間のしくみとが不可

欠だというわけで、こういう長つたらしい名まえになりました。京都の丹後地域や兵庫のあるところとかで始めて。滋賀は必ずしもターゲットに入っていないかっただけですが、最近一気に浮上して、行政も入ったかなり大きなネットワークで、研究会を開いて数か月になっていきます。

滋賀県全体が循環共生社会に変わらなければ、琵琶湖が良くなることはない。琵琶湖だけに対策をしてどうにかなるといふ段階は、はるかに超えています。厳密にはこれから計算するわけですが、粗っぽい試算をやってみても、そんな感じですよ。

**川那部** 一九九二年の、いわゆる「地球サミット」で採択された「行動計画（アジェンダ）21」に、「人間活動を自然の容量限界内で適応させる」というのがありますね。それこそ琵琶湖淀川水系での「生活様式の根本的な

変更」がなければ、生半かな対策などでは、言われるとおり無理だと、私も思っています。

**内藤** ええ。「それでも 助けたい」とおっしゃるのなら、本当に持続可能な社会に変わられたらどうですか」という提案をしたいんです。どちらかしか無理だと言うこと。たらふく食べておいて、太るのはいやだというのは、成り立ちません。

ただ、一言付け加えれば、「よくここまで耐えて、がんばってこられた」とは思います。それは、琵琶湖自体が偉大だったことと同時に、県民や行政が、いろいろなことをもすくやられたと、お金も相当につき込まれて、やっとここまで持ちこたえられた。これは高く評価すべきことですよ。

**川那部** その通りですね。人口が四〇％も増えている状況で、この程度で済んだのですから。しかし、逆に言えば、ちつとも良くなって来なかった。却って悪くなってきた。五年前の第九回湖沼会議で、内藤さんが話された「人口再配置モデル」も含めて、いかに痛みを感じても、抜本的にやらなければどうにもならないところまで、来ていることはたしかなのでありますから。

**内藤** それを「痛み」と感じるのか、それこそ健康体に戻るんだと思うか、そういうビジョンを私は描きたいのです。

全に一本取られましたね。「痛み」という言葉は間違いでした。そうさらに優れた、まっとうな人間にならなければいけない。

### センター長としての抱負

**司会** この四月から、「滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター」のセンター長に、正式に就任されたわけだけれど、そのご抱負は今までのお話でもかなり判ります。しかし改めて、少し話して下さいませんか。

**内藤** 今までのセンターについては、「難しい研究をいろいろとやってきているのは知っているけれども、現実の問題解決にそれがどうつながっているのかが見えない」との意見があります。それじゃあどうするか。センターの機能を二つに分けて、研究は国際的なレベルできちつとやる。もう一つ、そこで出たデータを加工して、いわばシンクタンクの機能、つまり解析の部門を作る。併任の私を含めてわずか三人ですが、それを作って頂きました。

**川那部** その解析に対して研究者が、センター内部の人はもちろん外部の人も積極的に批判することにして互いに進んでいくと、すばらしいですね。

**内藤** そうなんです。そういう解析を一方で努力してくれるのなら、それに役に立つデータを取ってくるということも、出てくるだろうと。そしてそれが、

## 館長対談



琵琶湖・環境科学研究センター（大津市柳が崎）

良い論文を書くことにつながるだろうと、私は思っているんです。

**川那部** 「行政を支える研究」というのは、現在の行政を進めるだけのものではなくて、行政が将来やらなければならない方向を、積極的に示唆して下さいませんか。

また、システムの本職にいう話ではないけれど、個々に対する最適解を集めたところ、全体システムとしては最悪解になることも、ありますものね。

**内藤** 省エネカーなどは、ほんとうの意味ではエコではない。途中経過としては良いのですが、

ほんとうのところは、「自動車の世界から自転車の世界へ」が、これからの真のエコなのだと思います。

**川那部** 内藤さんのおっしゃる循環共生社会が、軽く使われているものとは全く違うことが、改めて良く判りました。

**内藤** そして、「解析の期間として二年下さい。そのあと、こんなことならいけない」と言われれば、私は辞めさせて頂きます」とも、申したのであります。

**川那部** ちょっと言い過ぎで、格好良すぎる気もするけれど（笑）、それにしても、すごい抱負を語って下さいました。

それに滋賀県内は、お祭りなどをも含めて、「むら」のまとま

りが今も続いています。仲間がまだ残っている地域です。先程の循環共生社会システム研究でいえば、歴史的なこの「集り」を活かさない手はない。

**内藤** いみじくも言って頂きました。私たちは「エコライフ」などから単純に入っています。行き着く先はその地域の培ってきた伝統・文化、歴史だと、やっとながらつき始めたわけですね。

このような面はもとより、それ以外でも、琵琶湖博物館を全面的に頼りにしています。いや、頼らざるを得ないと思っています。どうぞ宜しくお願いします。

**川那部** こちらこそ、どうぞ宜しくお願いします。

琵琶湖・環境科学研究センター長  
内藤 正明氏

1939年大阪府生まれ。国立環境研究所統括研究官、京都大学大学院地球環境学学長などを歴任後、今年、琵琶湖研究の新たな拠点として大津市に開設された琵琶湖・環境科学研究センターのセンター長に就任。専門は環境システム工学。京都大学名誉教授。

たらふく食べておいて、  
太るのはいやだというのは、  
成り立ちません。

